

冷夏長雨の中での二十世紀梨栽培と今後の動向について

駐村研究員 足 立 康 一（鳥取県赤崎町・農業）

今年は全国で天候不順（冷夏・長雨）のため、米をはじめ多くの作物が、戦後最悪の生産量又品質となりました。我が鳥取県の梨もご多分にもれず最低の年をむかえました。我々生産者も大変な一年を過ごしました。今年一年の梨づくりを通しての反省と今後の展望ならびに取り組みについて考えていきたいと思っています。

鳥取県は、米・畜産・園芸・果樹のそれぞれに特徴を持った農業県です。その中で果樹は、梨を中心として多くの品目が栽培されています。梨は、全国でも有数の産地です。特に県中部地区は、その中心産地となっています。東郷町、倉吉町、東伯町、赤崎町と全国でも有名な産地として知られています。

特に二十世紀梨は、全国一の生産量をほこり、千葉県松戸市より導入後、約100年の歴史があります。鳥取県といえば、二十世紀梨と鳥取砂丘と云われるほど有名な作物となっています。

それでは、今年の梨栽培の一年をふり返ってみたいと思います。

平成5年1月～3月は、前年から続いている暖冬のせいか、作業も順調に進みました。雪のない正月が近年続いています。昨（平成4）年も、二十世紀梨の大敵の黒斑病も多かったためか枝には、病斑が数多くありました。冬に雪が少ないと病気や害虫が多いと云われています。やはり、「寒い時期は寒く、暑い時期は暑くない」と農家の人々は、よくいいます。

セン定、誘引も順調にすすみました。しかし、三月に入ると暖かい日と寒い日が交互に続いてやってきます。三寒四温という言葉が、ピッタリの時期です。

4月に入ると、防除が始まります。特に二十世紀梨は、大敵の黒斑病のため年間に最低15～16回、多い地域では20～23回の防除（消毒）が行なわれます。

4月は、とても忙しい日々が続きます。授粉（交配）のための花とり、セン定、誘引の見直し、そしてネコの手もかりたい交配。本（平成5）年の交配は、4月20日を中心にとっても天気の良い中で行なわれました。近年天候不順で、なかなかいい交配ができませんでした。本年は、温度も十分にあり近年まれにみるいい交配の年といえました。

5月に入り、交配後二週間後より、摘果、小袋かけ作業に入ります。この作業も休みがない、とても忙しい作業になります。今年は連休後より摘果作業が始まりました。また、二十世紀梨にとって、とても重要な防除時期となります。この時期の防除が、二十世紀梨の大敵、黒斑病の重要な防除時期で、防除には気のぬけない時期といえます。天候もまずまずで作業も順調に進みました。

6月2日、鳥取県では朝から一日中強風が吹き荒れました。瞬間最大風速は32mもあったということです。小袋をかけ終った時期と重なり、多くの被害が出ました。我が家でも1万袋かけた、ラ・フランスという梨の果実が、6割～7割も風で落とされてしまいました。県内の被害は、平均して2割～3割、多いところでは5割近い園もあったという話です。この強風により、梨の葉が、相当傷んだり、発育中の枝がおれたりしました。ハウスの二十世紀梨は、葉や枝が相当傷んでいました。

6月の下旬より雨が降り始めました。長い長い低温、日照不足、雨の日々が続きました。

このじめじめした天気は、9月中旬まで延々と続き、その間には台風も来ました。

6月の大袋かけの時期には、我が赤碕町のある農家では、袋をかけず、梨の木を切ってしまうされました。すでに二十世紀梨の多くが黒斑病にかかっている、袋をかけても病気で梨が落ちるので、あきらめて根元から梨を切り梨栽培をやめたということです。この園主は、今は勤めに出ておられます。

7月に入り、各地の二十世紀梨園では、黒斑病による落果が始まりました。拾っても拾っても、次の朝には梨がたくさん落ちていくという毎日でした。赤碕町では、「袋の中から黒斑病が、わいて出てくる」という表現もされるほど多くの黒斑病による被害も出てきました。

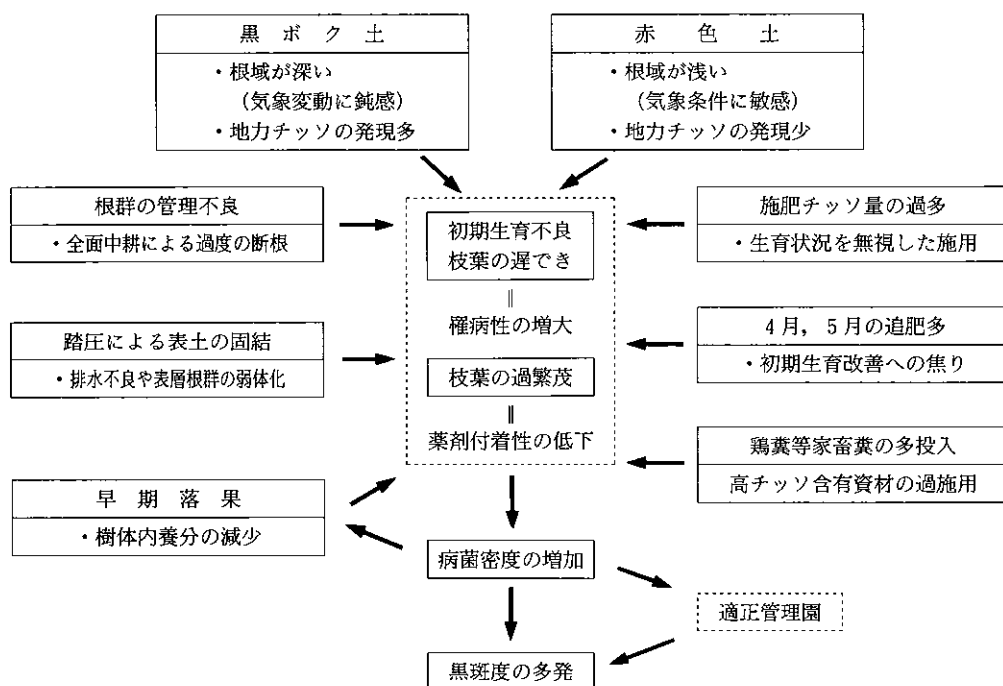
8月下旬より二十世紀の出荷が始まりました。それ以前に出荷された早生の新水・幸水でもそうでしたが、味が今一つという今年の

梨でした。6月下旬からの長雨、日照不足による影響は、相当のものでありました。

とてもたべておいしい梨とはいえませんでした。そのため、単価も低く推移していきました。梨自体も玉太りが悪く、アザ果や、早うれの梨など、梨の品質自体、悪いものができあがりました。

9月梨の収穫がすみ、農家の顔を見ると明るい顔が、ひとつもありませんでした。それに加えて、稲作もイモチ病、不稔等々、明らかに減収への道が、はっきりしていた時期でした。梨の平均出荷量は、60%位という話を聞いて、今年は、どの家も相当黒斑病にやられ、又台風による落果など、ありとあらゆる災害を受けた年だと思います。これは、梨だけでなく水稻も含め秋に収穫する作物すべてが受けた被害でした。

今年の反省として、黒斑病については、施肥量・施肥時期・家畜堆肥の使用量・深耕な



第1図 土壌及び施肥管理と黒斑病多発との関連

どの土壌管理の問題、防除の方法及び薬剤の問題、セン定方法などいろいろなことが原因としてあげられていますが、これだという原因はつきつめられていません。二十世紀梨を100年近く作ってきた割には、原因がはっきりしてないのは、いささか不満がありますが梨栽培をやってみて、あらゆる管理作業の結果として、黒斑病の多い少ないという結果が出てくるということです。梨の樹も生き物である以上、健康なからだを作ってあげなければ、病気に対する抵抗力はできないのだと思っています。それを我々農家は忘れているような気がしました。

黒斑病は、二十世紀梨を栽培している以上きけては通れない問題です。防除によって防ごうとしていますが、発想を変えて、病気にかからない樹づくり・根づくり又どう防除すれば一番梨の樹にとっていいのかを再度先人の知恵の中から学ぶ必要があると思います。防除も機械化（S・S）され時期がくれば、防除暦通りにやっているのが、現状です。樹の状態・天気等すべてのことを見てそして考えて自分の園にあった防除方法を考えていく必要があります。又6月2日の強風の被害が多かった園ほど、黒斑病の発生が多かったというデータもありました。強風による枝・葉のいたみが、樹の調子を狂わせそれが病気にもつながっているということだと思います。近年廃園が増加する中で、風に対する対策が叫ばれてきましたが、農家はなかなか行動が伴わないようです。強風による落果被害が毎年ある中、それを未然に防ぐためにも、自分自身で梨畑を風から守るようにしなければいけないと思います。一番いいのが竹垣の設置だということは、誰もが知っていることだと思います。分かっているのなら、行動を起こさないと何にもならないのです。

鳥取県では、梨といえば、二十世紀梨をさす言葉でした。他県では、幸水・豊水を中心にした栽培が行なわれています。しかし、鳥

取県では、幸水・豊水等の梨を、雑梨（ザツナシ）とよび、二十世紀梨以外の梨は、梨ではないように云っていました。それが、導入の遅れや又栽培面積がふえない原因となり、二十世紀一辺倒の農業経営となってしまっているように思います。過去二十世紀でもうけた時代が終わっているのに容易に二十世紀から脱却できなかったのも問題といえるのではないかと思います。

いろいろ原因はありましたが、今年度の二十世紀の数量は、254万4千ケースという結果となり、実にこの数量は昭和三十五年頃の数量となってしまいました。価格も、我が組合では、平均2,500～2,600円と昨年より700円～800円も安い箱単価となりました。これでは、梨農家は梨では、生活できないということです。梨栽培の経費は平均通常売上の50～60%かかります。売上げが通常の50～60%しかないのですから、ほとんどの農家は赤字経営となりました。今秋も各地の梨園では、チェーンソーが、活躍しました。廃園が増えました。隣接する中山町では、約30町歩が廃園となるそうです。こんな状況の中で、我々梨生産は、どうしていけばいいのか、農家それぞれの考えが交錯している状況です。

第1表 ナシ品種別販売実績

項目 品種			前年対比	
	数 量	単 価	数量	単価
ハウス二十世紀	158 千箱	4,322 円	101 %	83 %
二十世紀梨	1,988	2,365	77	75
新 水	90	2,959	79	88
幸 水	162	2,705	87	75
豊 水	283	2,333	88	66
新 興	209	2,492	88	111
八 雲	9	3,170	69	84
新 世 紀	75	3,281	94	81
早生二十世紀	27	2,942	69	78

注：国内販売分。

最後に、県ならびに各関係機関が出している反省点・資料に基づいて、今後の方向性について述べてみたいと思います。

1 肥料・セン定等を考えて黒斑病にかからないような栽培をする（第2表）。

2 防除の時期・薬量をふやし徹底防除をやっていく。

3 ハウス二十世紀や幸水・豊水などをふやしバランスのとれた経営をしていく（第3表）。

4 ゴールド二十世紀へ改植していく。
などいろいろな方向性が出されています。

しかし、現場農家においては、黒斑病の原因がはっきり示されておらず、何をどうやってどう改善していけば黒斑病がへるのか十分に伝わっていません。我が組合においても、指導部からは、黒斑の防除については、自信がないので農家が判断して栽培をしてくれというような発言も出ています。指導に自信がないので勝手にして下さいということです。

我々の先輩も、二十世紀梨を栽培していく中で、黒斑病と戦い鳥取の梨をつくり上げてきました。指導者から伝わってくる本音は、黒斑が出る二十世紀梨はもうダメだという感じが私には伝わってきます。

第2表 今後の黒斑病対策（骨子）

項 目		対 策
菌 密 度 の 低 下		①収穫後防除の徹底 ②クリーン運動の推進 ③封じ込め剤の機械散布の検討
	防 除 の 改 善	①ロブラル耐性菌の発生状況に応じた防除暦の作成と、地域別、菌密度別対応 ②防除方法の改善 1) SS の使用方法の再見直し 2) 小袋掛け前における動噴散布の導入
健全な樹体づくりと発生要因別の栽培	施 肥	①施肥量の多い園については、チッソ量の水準によって、一時的に減ずる ②落果程度、落葉の程度により礼肥の施用量を減ずる ③元肥中心の施肥体系とし、3月～5月の肥料は施用しない
	家畜糞 尿堆肥	①連年施用している園、大量投入した園では、当面使用しない ②多発園では、当面使用しない ③使用に当たっては、チッソ量を計算し、他の肥料を減ずる ④使用する園では1樹あたりコンテナ1杯を限度とし、置き肥とする
	中 耕	①多発園では当面実施しない ②実施する場合は10月中に終了する ③1/3程度を目安とし、株元は実施しない
	深 耕	①11月中に終了する ②穴の中に規定以上の肥料を入れない ③排水を考えた深耕を行ない、粗大有機物を投入する
	排 水	①排水不良園では、1樹10穴程度のボーリング処理を実施する ②果樹園周辺、樹間に溝切りを実施する
	せん定方法の改善	①古い側枝を更新するよう、マチ枝を多く残す ②病斑の多くついた側枝は切り替えるか、封じ込めを徹底する ③早期展葉態勢を確保するため、優良側枝づくりと適正配置に努める
改良小袋の使用		①改良小袋の実用化

第3表 変更する品種計画

品 種	現在(a)	樹 齢	計画(a)	樹 齢
二十世紀(平坦)	55	30	20	30
ハウス二十世紀	20	30	20	30
幸 水	15	15	15	15
晩 生 梨(新興)	10	20	10	20
改植(ゴールド)			25	2
接 ぎ 木(新興)			10	30
合 計	100		100	

注. 30年生二十世紀25aをゴールド二十世紀(2年生)に改植する, 30年生二十世紀10aを新興に一挙更新する.

しかし、私は負けるわけにはいきません。梨の樹の立場になって栽培を考えていこうと思っています。肥料のやり方、量、質の問題を再度検討していかなければなりません。

また、土づくりの中味を考え、ただ家畜糞尿をボカボカやる土づくりは再度考える必要があると思います。整枝・セン定技術も、ある面では、画一的なものとなっています。技術が一般化される中で、昔いた精農家、篤農家と云われる人が、いなくなっていました。もう一度彼らの技術をひもとく中に、黒斑病の解決方法や梨の増収・品質向上などいろいろなものがみえてくると思っています。

平成5年の農業は、冷夏・長雨の被害だけではすまなくなってしまいました。米問題が部分輸入という形となり、農家の今後の生き方が問われています。平成6年は、鳥取県の梨栽培が、生きるか死ぬかの選択をせまられる年になりそうです。米づくりもそのような年になってくると思います。もう一年頑張ってみましょう。

第4表 家畜糞尿入り堆肥に含まれる無機態チッソ量の例

堆 肥 の 種 類	全チッソ量 (%)	無機態チッソ 含有割合(%)	有機態チッソの 無機化率(%)	現物1tに含まれる 無機態チッソ量(kg)
家畜糞混合発酵堆肥	1.7 (1.0)	12.6	12.9	1.3
発 酵 堆 肥	1.3 (0.4)	15.3	-4.4	0.6
牛 糞 堆 肥	1.8 (0.4)	24.9	0.1	1.3

注(1) チッソ()は現物あたり.

(2) 家畜糞尿の害は、チッソだけでなく、カリ・ナトリウムなどの過剰障害もある.